



座談会

これからの伝道を語る

全日本18マラナ・タ、そしてビジョン2020へ

教会がめざすものは

— 2015年7月に世界総会大会が開催されてから1年半が経ちます。いま、どんな伝道方針を展開しているのですか。

島田 ● 世界総会は、Reach the World というスローガンのもとに、全世界に福音を宣べ伝えることを強調しています。特にこの5年間掲げているのが、T M I (Total Member Involvement) です。日本では「全員参加伝道」と訳しました。牧師のみならず、老いも若きもすべての教会員が全世界に三天

使の使命を伝えていこうということ、ことを強調しています。

— 北アジア太平洋支部(以下、NSD)はいかがでしょうか。

島田 ● ミッション・ファースト、教会の使命である宣教を第一にしていこうというのが、NSD の変わらない姿勢です。教会のすべてのプログラムを、祈りのうちに救霊に結び付けていこうと強調しています。

— 世界総会、NSD、日本の総理は、それぞれ再任されました。各総理が過去5年間推進してきたことを、これから継続

していくということでしょうか。

島田 ● 内向きの教会を外向きに、どちらかというと、教会中心である教会を伝道中心の教会に変えていきたいという願いの中で、T O K Y O 13、全日本15に挑戦させていただきました。「もつと伝道のために献身すべきだ」という思いが、牧師の中にも信徒の中にも、少しずつ生まれてきているようにみえています。

— 伝道局長として1年が過ぎようとしています。どのようなどことを強調しておられますか。
山地 ● 教会は伝道のため、人々の救いのためにあります。その

【ビジョン2020】

びじょん
にせんにじゅう

2020年までに教会員2万人、礼拝出席者2万人という日本教団の数値目標。

【全日本18 マラナ・タ】

ぜんにほんえいていーん
まらな・た

2018年5月全国100か所以上で収穫のために行う10日間の連続講演会。私たちが全員参加伝道をして、大勢の求道者を見つける必要があります。

語り手 ● 島田真澄 教団総理
山地宏 教団伝道局長

聞き手 ● 柴田俊生 本誌編集長

ことを教団全体として、これまで以上に、もっと意識していくように力を入れていきたいと思っています。

ビジョン2020

――2016年次理事会で採択された「ビジョン2020」とは、何ですか。

島田 ●日本の信徒数は1万5千人なので、5年間で5千人増やして、2020年までに2万人信徒、礼拝出席者を2万人にというビジョンです。

NSDは、「Vision One Million 2020」を掲げています。これは、現在70万人のNSD内の信徒を、2020年までに100万人にしようという大きな計画です。70万人の信徒のうち、毎週礼拝に出席しているのは30万人といわれています。この30万人が、自分たちの使命は救霊であるとしつかりと確信を持ち、5年で一人が一人を導くならば信徒の数が100万人になります。日本でも何年か前に取り組んだことがありましたが、徹底しなかったかなと思います。今回、NSDのビジョンを受



け止め、日本も礼拝に忠実に出席しておられる5千人の信徒が2020年までに一人の人をキリストに導くならば、5千人の救霊がなされ、2020年には2万人の信徒という悲願が達成されることになります。ただ一人が一人をという、責任が、それぞれの信徒に散って、意識が薄れてしまうかもしれません。今回は、各教会、集会所、聖書研究会単位で、現在の礼拝出席数と同じ数を2020年までに導く方法を祈りの中で考え、行動に移していくことを願っています。そして同時に、「2・3・4の祈り」が神の祝福の中で本当に実現するならば、もっと早く達成できるかもしれません。

山地 ●「2・3・4の祈り」は、祈りですから、天との絆です。同時に教会員とベアで祈りますので教会の絆でもあり、求道者を交えての祈りですので、地域との絆にも関係してきます。ですから、まずは各教会で、この「2・3・4の祈り」を徹底して取り入れていただけたらと思っています。

それと同時に教会に来ていただいた方に教会に留まっていたことも大切なことです。3年前から支部ではリテンションサミットが行われていますが、そこで強調されている小グループを充実することによって、新しい弟子を作る弟子育成の流れができていきます。

に帰ってきていただけるような働きもしていけたらと思います。新しい人が一人救われるのも、私たちにあって大きな喜びですが、教会を長く離れていた人とも共に礼拝できるということも同じ喜びです。そのために長欠者リストを作成し、この人には誰が連絡を取るかということまで詰めて進めていってほしいと思います。

山地 ●安息日学校のアクションユニットでは、すでに長欠者を振り分けて祈り、いろいろな関わりを持っている教会もあります。安息日学校はこの教会でも行っていますので、何か新しい特別なプログラムをするのではありません。安息日学校において、長欠者のために祈り、具体的な取り組みについて考えていくことができます。

全日本18 マラナ・タの経緯

――2018年5月に世界総会総理を含めて伝道講演会を開催するというのは、とても大きなプロジェクトです。これは、どのような経緯で生まれたのでしょうか。

島田 ●2015年の世界総会大会後、テッド・ウィルソン世界総会総理に「日本の宣教120周年記念礼拝に説教者として来日してほしい」とメールで要請しました。すぐに返信があり、「他の予定が入っているのですが、その日は難しいが、2016年には必ず来日する」という約束が記されていました。実際、2016年3月に来日され、日本の私たちを励ましてくださいました。

そのメールのやり取りからしばらくして、「世界総会がサポートする伝道集会を2018年は日本で開催したい」というメールが届きました。世界総会総理は数年前から毎年どこかの国を選び、チームを率いて伝道講演会をしています。その対象に日本を選んだというのは大きな驚きでした。2016年はアメリカのルワンダで2週間の伝道講演会が行われ、10万人近いパプテスマがありました。世界総会総理が行くというのは、それほどの収穫が期待され、また祈られていたわけです。その開催に日本が選ばれたというのは、私にとって大きな重荷であると

同時に、神からの祝福であるという喜びでもありました。

2015年10月の世界総会年次理事會中の安息日礼拝のことで、ウィルソン先生が説教中に、「来年はルワンダ、2017年はルーマニア、そして2018年は日本に行く」と発表されました。そして壇上から「パスタ1島田、全員参加伝道と一緒にやろう」と言われました。これは日本で受けないわけにはいかないと改めて思われました。

世界総会が提案して始まったプロジェクトではありますが、これは日本のプロジェクトであり、神が与えてくださったプロジェクトであると考えています。この伝道講演会を日本のプロジェクトとして、世界総会、そしてNSDに支援していただくスタンスでいきたい。つまり、これが各教会のプロジェクトであり、日本のアドベンチスト教会のプロジェクトであるということ、皆さんに、ぜひご理解いただきたいと思います。

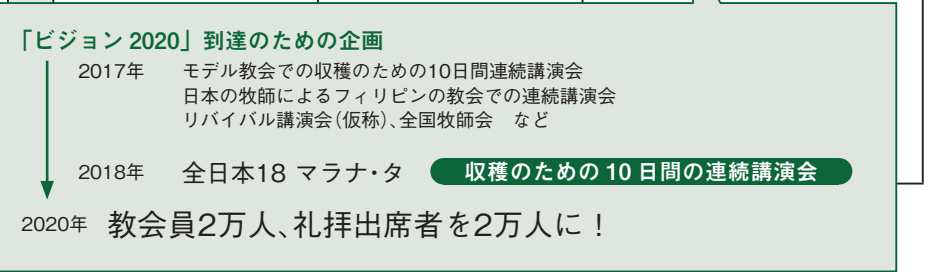
2016年10月の世界総会年次理事會の際、「この伝道講演会には私たちのプロジェクトです。世界総会には支援していただき

たい」と言いましたら、世界総会総務や副総理の先生方も「その通りだ。私たちはどんな支援もするので、日本にはがんばってほしい」と言われました。お

会いた一人ひとり「私たちは日本のために祈っている」と言ってくださいます。

このように、世界総会の祈りと支援を痛切に感じています。

	世界総会	北アジア太平洋支部	日本
スローガン	「Reach the World」 	「Mission First～宣教第一」 	教団の5年間のモットー 「起きよ、光を放て。主は来たりたもう！」 伝道基本方針 「天との絆・教会の絆・地域との絆」 目指している教会の体質 「Mission First～宣教第一」
推奨	TMI (全員参加伝道) 	TMI (全員参加伝道)	TMI (全員参加伝道) 2・3・4の祈り 執り成しの祈り 777の祈り など
幻		数値目標 「Vision One Million 2020」	数値目標 「ビジョン2020」



これが、ことの発端であり、今の状況です。

マラナ・タに込められた思い

――2018年の伝道講演会は、「全日本18 マラナ・タ」と名付けられましたが、どのような意味が込められているのでしょうか。

山地 ● 私たちアドベンチストは再臨運動から始まっていますので、再臨のために準備をするというのは当然のことです。長い目で計画を立てる必要もありますが、間もなくキリストが再臨されるという気持ちで宣教の働きに携わっていくのも大切なことです。そのような意味で、この5年任期の中間点である2018年に「マラナ・タ」という計画があり、皆で力を合わせ、より多くの日本の同胞の救いのために働き、一緒に再臨を迎える人を一人でも多く備えていくことはふさわしい計画だと思います。

島田 ● 多くの人に再臨の備えをさせるという私たちの教会の使命そのものに直結したテーマといえます。

2016年の取り組み

――昨年、2016年はどのような動きがあったのでしょうか。

島田 ● 昨年3月にウィルソン先生も交えて行われた教団理事会が行われました。「ウィルソン総理には、可能な限り多くの箇所をまわって伝道講演会をしていただきたい」という声で、日本の理事からは圧倒的に多かったです。しかしウィルソン先生はそれを望んでおられないということは空気として感じられました。昨年のルワンダの伝道講演会は2、200か所で同時に行われ、ウィルソン先生はその1か所を担当したに過ぎなかったのです。これこそ世界総会が取り組んでいる全員参加伝道だと考えたとき、みんなでするしかないと思ったのです。そこで昨年6月に行われた全国牧師会において、まず地区長に、そして全牧師に、全国100か所で10日間の伝道講演会をしようと投げかけました。

――どのような反応でしたか。

島田 ● まず戸惑いですよね。10

日間もするのか、何を話したらいいのか。マーク・フィンレー牧師の原稿を使うと伝えたとき、それが果たして日本人に向くのだろうか、という声もありました。自分の教会は、とても伝道講演会をして人を迎えるような状況ではないという人もいました。肯定的、否定的、それぞれさまざまな反応がありました。その後、段々と皆さんが消化していく中で、現在は8割くらいの牧師が前向きになってきているようにみえています。

山地 ● 確かに最初は否定的な意見もありました。やらない理由を考えればいくらでも出てくると思います。ただ時代は違いますが、戦後の時代に長期の伝道講演会を行い、何十人、何百人という人が教会に入ってきて、そういう人たちが今でも忠実に教会を支えておられます。そのことを考えると、何十年もこのような伝道講演会をしてきませんでしたでしたが、この時代にもう一度挑戦してみる意味もあるのではないでしょうか。ある牧師は、「自分も10回、20回という伝道講演会で導かれたので、このチャンスに、ぜひ取り組んでみた

い」と言ってくれました。やらない理由を挙げるのではなく、どうしたらできるだろうかと考えるように変わってきているように感じています。

――教団と教区、教区と教会、教会内においても、中心的に動いている人と傍観者では、温度差があるように見受けられます。その差を縮めて、一つの思いになっていくには、どうしたらいいでしょうか。

島田 ● 鍵は、いつの時代も牧師だと思っています。牧師の心に私たちの思いがどのように伝わっていくかが大切です。ですから、牧師会、教団教区の理事会が牧師への伝達まで含めたことをいつも考えていく必要があります。議論されたことが教団教区の理事会の会場で完結してしまうのではなく、それが各教会までどのように影響を与えていくのかを踏まえていかなければいけません。牧師よりも信徒から火が点くこともありませんが、私たちの願いとしては、このために召されている牧師が、まず救霊の火を心の中に熱く燃やしてほしいと思っています。

いでしょうか。

山地 ● 天との絆ということで、まずは祈りとみ言葉によって、神との個人的な関係を深めていくことができます。

島田 ● 霊的リバイバルのために今年3月と9月に、NSDから祈祷院の洪光義^{ホウカギ}先生が来日されます。具体的なプログラムについては、これから検討していきますが、たくさん信徒が参加し、霊的な準備を始めていただけたらと思っています。

また「2・3・4の祈り」も実行に移し、礼拝出席する求道者が与えられるように共に祈っていきましょう。

――伝道講演会の準備以前に、いかに求道者を増やしていくのが大きな課題ですが、アドバイスをお願いします。

島田 ● 台湾では、2016年12月の三大都市での伝道講演会までに、800名の求道者を集めたそうです。その秘訣^{ひけつ}を尋ねてみました。牧師が信徒に、自分の家族や友人を聖書研究に誘うように呼びかけ、誘った方々の名前をリストにして祈り、牧師や長老が手分けして聖書研究を

2017年の取り組み

――2018年の伝道講演会を準備するために、世界総会から今年6月にフィリピンでの伝道旅行が提案されました。

山地 ● 各教会において、しばらく長期の伝道講演会を行っていませんので、フィリピンで体験してみるという目的があります。今回は、日本から約30名の牧師

――そして今年の秋には志願した教会によって実験的な伝道講演会が行われます。

山地 ● 2018年にいきなり10日間の伝道講演会というのと、すべて真っ白なところから始めなければいけません。まずは、1年前に一度体験しておくということ、いくつかの教会が手を挙げてくださいました。その教会にはモデル教会として、今年の秋に10日間の伝道講演会を行

準備について

――2018年に向かって、霊的にはどのように準備したらいい

全日本18マラナ・タに関する

Q & A

教会で検討するとき参考にし、それぞれの教会で準備を進めていきましょう。

授けたそうです。

日本の教会も、「牧師や長老、教会理事が必ず聖書研究するから、信徒は2名、または3名の求道者を連れてきてほしい」というところまで持っていたら、すばらしいと思います。教会生活が長くなればなるほど、教会の外の友だちがいなくなってしまう。それでも全く世の中との関係がなくなるわけではありませんで、常に意識していたいものです。

山地 ●信徒訓練のひとつとして、聖書研究者を探すための訪問伝道についてのセミナーを計画しています。訪問にはいくつかの種類があります。長欠者訪問や、アンケートを取る訪問、サインズを紹介する訪問などです。一番やりやすいのが、教会の行事を紹介する訪問です。

島田 ●10日間の伝道講演会がなぜ有効かというと、10日間のうちに多くの教会員が求道者と友だちになり個人的な関係を作れるからです。3日間の伝道講演会で関係を構築するのは難しいでしょう。2017年に各教会でセミナーや伝道講演会を行い、求道者の獲得に取り組むと思

いますが、効果的に行うために、単発ではなく、1週間連続や毎月行い、その中で教会員が求道者と友だちになり関係作りをしていくことが大切なポイントです。ですから、関係作りができるようなセミナーや伝道講演会の企画を考えていかなければいけません。

山地 ●2016年7月の本誌特集で、つながりを持つための100の提案を掲載しました。これは、『長老ダイジェスト』（英文）を訳したのですが、知り合いの裾野を広げるためのヒントになります。ここで紹介されていることは、誰でも取り組めることだと思います。

島田 ●ぜひ機関においても、働き人がそれぞれの教会で奉仕するだけではなくて、アドベンチスト以外の働き人や、教会から離れている働き人への関わり方もぜひ考えてほしいと思います。働き人が、さらに生き生きとしたキリストの弟子に変えられていく機会に、2018年を用いてほしいものです。

――最後に一言お願いします。

山地 ●私はどちらかというと前



に出て行くタイプではありませんが、何かできることはあると思います。もう神はすでに働いてくださっています。

私たちに、キリストの愛で受け入れる備えができていれば、神の導きで教会に來た人は救われていきます。ですから、出て行くことと、來た人たちを受け入れることは、同じくらい大事なことです。神が送ってくださった人を一人も漏らさず教会に留めておくという姿勢で臨みたいのです。「全日本18マラナ・タ」が、神からの救いの働きを見させていただく体験になることを願っています。

島田 ●先日教団青年部のフエイスブックに「教団は向こう5年間で5千人の救霊を目指していく」と書いたとき、日本に來て

間もない外国の青年が、「人にはできないが、神にはできる」と日本語でコメントしてくれました。まさにその通りだと思います。人間的に考えれば、「もうそんなの無理だ」と思うようなビジョンかもしれません。しかし、「人にはできないが、神にはできる」ということは否定できない事実です。神はこの終わりの時代に何をなさろうとしておられるのでしょうか。それは一人でも多くの人が救われることです。そのことを、祈りの中で、私たちもしっかりと受け止めていきたいです。

この大きなビジョンを達成できると考えるのは、人間の力を過信している傲慢さです。そして、達成できないと考えるのは、神の力を過小評価していることです。これもまた人間の傲慢さです。その意味でも、私たちは神の前にひざまずいて祈る必要があります。私個人としても、そして祈りの共同体として教団、教会としても、謙虚に祈り、忠実に誠実に神のなさるうとしている救霊の業を推進していきたいと考えています。共に祈って前進しましょう。

Q どうして、「全日本18マラナ・タ」をするのですか？

家族や友人、近隣の方々など、周りの人たちとの関係を深め、イエス様の再臨を、大勢の人と喜んで迎えるためです。

Q 具体的には、どのような計画なのですか？

2018年5月に、日本全国100か所以上で、同時に10日間の収穫のための講演会を開こうという計画です。

Q 世界総会総理のテッド・ウィルソン先生が講師になって行う講演会ではないのですか？

ネット98の時のように、スクリーンを見ながら参加するのですか？
テッド・ウィルソン総理は東京の1つの教会で講演を行う予定です。それ以外の場所では、それぞれに別の講師が10日間の講演を行うこととなります。

Q もしかして、100か所それぞれ別々の講師が、10日間の講演を行うのですか？

その通りです。最低でも100人の講師が必要になります。

Q 講師はもちろん牧師の先生がやってくるのですか？

よね？

全国の牧師の先生方には、講師になっていただくこうと考えています。

Q 100人も牧師はいないですよね？ 1人の牧師が兼牧している教会などは、どうすればいいのですか？

1人の牧師が複数の教会を兼牧している場合、その牧師は1か所の講演に集中していただきたいので、その中の1つの教会で講師となります。それ以外の教会では、まず、その教会の信徒で講師になれる方を検討していただけると幸いです。

Q 10日間の講演など、したことがありません。講演の原稿やスライドは自分で作るのですか？

教団で10日間の講演原稿やスライドは準備します。それを使っていただくことができます。

Q 複数の信徒で、交代に講演をしてもかまわないでしょうか？

できることならば、1人の人が講師を務めるのがいいと言われています。複数の人が講師を務めると、講師によって善し悪しが比較

されたり、講演の内容以外のことに注意がそれてしまう危険性があるからです。でも、複数の人が交代で講師を務めるならばできるというのであれば、まったくやらないよりも、それの方がいいと思います。

Q 準備される原稿は、勝手に文章を変えてはいけませんか？

自分でその原稿を一部変更して自分流にアレンジしてもかまいません。

Q 自分で10日間の原稿を作ってもいいですか？

全10日間の講演原稿を自分で作ってもかまいません。ただし、収穫の講演会ですので、講演会に出席される方が、その10日間でバプテスマの決心をするように導くような内容が期待されます。

Q 自分の教会で、講師になれる信徒が見つからない場合は、どうすればいいですか？

ゲストを講師として呼ぶことができます。

Q どのような人をゲストとして呼ぶことができますか？

この講演会のために訓練を受け



た青年や、元PMとして日本で働いておられた先生方、海外の牧師、また引退牧師の先生方にも、講師をお願いできるかもしれません。牧師を通して、教区・教団に希望を出してください。

Q 海外の牧師を講師に呼ぶ場合、通訳者は教団で探してもらえるのでしょうか？
申し訳ありませんが、通訳者はそれぞれの場所ですべて探していただくことになると思います。

Q 自分の教会の外から講師を招く場合、かかる費用は自前になりますか？
教団も、できる限りの支援をすることを考えています。

Q 100か所以上で行うというのですが、どのような100か所を考えているのですか？
教会堂のある教会や集会所では、ぜひ「全日本18 マラナ・タ」に参加していただきたいと考えています。

Q 教会堂のない集会所や聖書研究会は、参加しなくてもいいのですか？
できるだけ多くの集会所や聖書

研究会も、この10日間の講演会を開いてほしいと考えています。できれば、全国のすべての教会、集会所、聖書研究会が同時に講演会を開くことが理想です。

Q 教会は自宅から遠いので、近所の人を誘って10日間通うのが大変です。自宅や近くのコミュニティセンターの部屋を借りて行ってもかまいませんか？
もちろんかまいません。自宅で行う場合は、連続公開聖書講座という名目で行うのもいいかもしれません。

Q そうなると1つの教会が2か所で行うことになりましたが、それでもいいのですか？
むしろ大歓迎です。できるだけ多くの場所で収穫の講演会を開いてください。これをきっかけに、新しい集会所ができるかもしれません。幻を大きく持ちましょう。

Q うちの教会には、外国から来ている方もいます。外国人のために、その国の言葉で講演会をすることはできますか？
講師を見つけることができれば可能です。教会に来ていて外国の方が講師になってもいいですし、海外から講師を呼ぶことも可能で

し、その人が決心をするかどうかは、聖霊の神様の声に、ご本人がどう応えるかによります。聖霊の神様の働きに、大いに期待しましょう。

Q 講演会に誘える求道者がいないと、収穫のための講演会を開いても意味がありません。どうすればいいのですか？
2018年5月まで、まだ1年以上あります。今から求道者を増やしましょう。

す。牧師を通して、教区・教団にご相談ください。

Q 1つの教会で複数箇所で行うことにすると、奉仕者が少なくなり、力が分散してしまわないでしょうか？
今回は10日間の連続講演会です

ので、できる限り講演自体に集中して、その他の部分はシンプルにするといいでしょう。講演後の茶話会はなくともいいですし、特別賛美も毎日でなくてもいいでしょう。講演者と奉仕者が数名いればできるような形を考えてはいかがでしょうか。

Q 10日間休みなしに連続で行うのですか？
基本形としては2018年5月6日(日)・10日(木)と13日(日)・17日(木)の10日間を考えています。でも、ウィルソン総理が日本におられる5月3日から20日の期間内であれば、どの10日間でもかまいません。休まずに10日間でもいいですし、週末の金曜日、土曜日、日曜日を3週連続で行って、それにあと1日をプラスするという形でもかまいません。それぞれの教会で、一番可能性のある日程の組み方を工夫してみてください。

Q うちの教会は高齢化しています。求道者を見つけることも難しい状況です。求道者を増やすにはどうすればいいのですか？
まずは、祈ることから始めましょう。「2・3・4の祈り」をぜひ始めてください。この祈りは、神様が求道者を送ってくださいたときに、その人を受け入れるための準備でもあります。準備ができているところに、神様は人を送ってくださいと信じています。

Q 求道者を増やすために、祈る以外にできることはありますか？
周りの人たちにとって、良き隣人であるように努めましょう。アドベンチスト・ライフ誌2016年7月号の「つながりを持つための100の提案」を参考にしてください。

Q 2018年の講演会は、健康伝道の講演会ではありませんか？
健康伝道の講演会ではありません。ただ、健康伝道は、求道者を得るための有効な手段となりますので、福音の右腕とも言われます。各教会で健康伝道を活用して、収穫の講演会に招待できるような信頼関係を、多くの人々との間に育

Q 講演会は夜に行わなくてはいけないのでしょうか？
講演会を行う時間は、対象者によって自由に決めてかまいません。学生やサラリーマンが対象の場合、夜に行うのがいいでしょうが、主婦や高齢者が対象の場合、昼間に行う方がいいかもしれません。

Q どうしても10日間しなければならぬのでしょうか？
今回の講演会は収穫のための講演会です。バプテスマの決心は、一生に一度の大きなことです。決心に導くためには、それなりの時間を、相手に与えることも必要です。そういう意味では、最低でも10日間は必要だと思います。ただ、10日間できないから全くやらないというよりは、5日間ならできるといふことであれば、5日間でも開催することを考えていただけると幸いです。

Q 10日間の講演会で、本当にバプテスマの決心者が出るのでしょうか？
人を救うことができるのは、神様だけです。私たちは講演会に出席される人々の、良き隣人となることができます。また、その人々の救いのために、執り成しの祈りをささげることができます。しか

てておきましょう。

Q 「全日本18 マラナ・タ」のために、どのような準備をすればいいのですか？
2017年にいくつかの教会が、実験的に10日間の講演会を行う予定です。その準備が、2017年に入るとすぐに始まります。このモデル教会が作るマスター・カレンダーを参考にすることができま

す。教会ごとの決起集会、リバイバル集会、継続的な「執り成しの祈り」プロジェクト、頻繁な地域との交流イベント、講演会に出席する人を受け入れる体制作りと訓練、フォローアップのための訓練、プレ講演会などの具体的な事柄が1年分のカレンダーに組み込まれてくるでしょう。

Q たくさん準備が必要なんですね。始まる前に疲れてしまいませんか？
教会は、人々の救いのために存在しています。そのために、教会が奉仕するときに、神様は教会を豊かに祝福してください。神様が祝福してくださって、教会を通してたくさんの人々が救われるのを見るときに、疲れは吹き飛んでしまいます。大丈夫です。心配ありません。